

生殖医療と家族援助

～卵子ドナーの“もうひとつの^{わけ}動機”～

荒木晃子

卵子を使ってください

前号では、卵子ドナーになりたいと望む 200 名を超える女性たちの利他的精神を紹介したが、そのなかに、LGBT 当事者 2 名が含まれていたことを記憶している方がおられるだろうか。今号では、ドナー希望者が持つ利他的精神以外の動機についても触れてみよう。

通常、LGBT とは、L=レズビアン、G=ゲイ、B=バイセクシュアル、T=トランスジェンダー等のセクシュアル・マイノリティの総称として使用される。果たして、セクシュアル・マイノリティである LGBT 当事者は、卵子ドナーになることができるのだろうか。また、なぜ、それを望むのだろうか。

卵子ドナーになるには、生物学的性が女性であることが必須の条件となる。つまり、OD-NET に卵子ドナー登録を希望した LGBT のお二人は、生物学的性が女性であることには違いない。LGBT の内、生物学的性が女性であるのは L(心も体も恋愛対象も女性)と T(体は女性だが、心は男性のトランス男性)、もしくは、B(なかでも体は女性でバイセクシュアル)の当事者である。このうち、筆者が過去に T(女性の体のトランス男性)と「子どもを持つこと」についての話をした際、彼からは個別、且つ独創的な私見を耳にした経験があった。

彼には、卵子ドナーになる“もう一つの^{わけ}理由”があった。(以下は、本人の承諾を得たうえで対話の一部を抜粋した内容である。)

オレは、自分の卵子は必要ない

ある日、知人のトランス男性は筆者に語った。

「自分の卵子はいらないんです。(一緒に暮らす)パートナーの彼女が自分で子どもを産みたいと言っているの。彼女が産んだ子どもと一緒に育てればいいかなって(思う)。オレの子どもを産ませてあげられないのは悔しいけれど、自分には、卵子はあっても、精子はないから仕方ない。そのことは、彼女と話し合っただけで、仕方のないことだと二人ともあきらめている。いずれは、お金をためて性別変更手術をするつもりです。手術をすれば、乳房も卵巣も子宮も、全部取ることができて、戸籍も男性になれて、彼女と正式に結婚もできるはず。手術すれば、やっとな、本来の自分のからだを取り戻せるんです。もう、乳房も卵子も子宮も必要ありません。今でも、まだ体にあると思うと、自分のからだ嫌になる。一日も早く手術をして、“いないもの”を全部取ってしまいたい。でも、オレにはいないものでも、それがなくて苦しんでいる人もいますよね？ 子どもを産みたいのに、卵子や子宮がなくて、自

分では子どもが産めない人がいるんですよね？
じゃあ、それが必要な人がいて、誰かの役に立つのであれば、卵子も子宮も、誰かに使ってもらえばいいと思う。自分には必要ないものが、誰かの役に立つのであれば、それはそれでうれしい。ごみ箱に捨てられるくらいなら、誰かの役に立った方がいいに決まっています。」

さて、皆さんは、この語りに何を思うだろうか。